アスパラガス「採りっきり栽培®」セミナー

明治大学農学部野菜園芸学研究室
パイオニアエコサイエンス㈱

▶11月5日
明治大学生田キャンパス（神奈川県川崎市）

11月5日、明治大学生田キャンパスでアスパラガス「採りっきり栽培」のセミナーが開催された。5月の新栽培法発表会に続く2回目のセミナーで、会場には全国各地から約180人が集まった。

常識を変えた単年度「採りっきり」

現在、アスパラガスの作型には大きく分けて2種類ある。一つは春採り栽培で、夏以降は株養成に充てる。かつてはこの方法が一般的だった。もう一つは立茎栽培で、こちらは夏から秋にかけても若茎を収穫する。こうした慣行栽培での本格的収穫は通常定植後3年目からで、以後10年以上にわたって収穫し続ける例が多い。

これに対して、「採りっきり栽培」での収穫は定植翌年の春採りのみ（6月ごろまで）になる。採り終えたら株をすき込んでサイクルは終了する。

単年度の新栽培法という点では「伏せ込み促成栽培」も共通する。こちらは、茎葉が黄化して養分転流した株を掘り起こし、伏せ込み床に植え付ける。いわば養分転流が早い地域向きの栽培法だ。今回のセミナーでも群馬県での事例が紹介された。加温が必要だが、価格の高い冬期出荷が可能になる。

「採りっきり栽培」は、セミナーの主催者でもある明治大学農学部野菜園芸学研究室とパイオニアエコサイエンス㈱が共同研究で進めてきたものだ。

すでに「採りっきり」専用ともいえる品種も開発されている。「大宝早生」「クリスマス特急」「ウィンデル」「満味紫」（いずれもパイオニアエコサイエンス）。「満味紫」以外は伏せ込み用の品種でもある。

「採りっきり栽培」は露地栽培を前提に組み立てられた。水田転作品目にもなりうる。現に千葉県君津市の試験圃場は水田である。ただ、単年度栽培で連作が難しいため、アスパラガスを組み込んだ輪作体系の構築が必要になるだろう。

早期定植による養成期間の長期化

なぜこのような栽培法が開発されたのか。アスパラガス栽培では根に蓄えられた養分量が収量を大きく左右する。この養分は立茎時に光合成で作られ、冬先の黄化時に根に転流して蓄えられる。若茎をすべて採りきってしまえば光合成はできない。したがって、根も大きくは育たないことになる。

にもかかわらず、なぜ「採りっきり栽培」が可能になったのか。一つには早期定植の導入がある。従来、霜の降りる時期での定植は不可能とされてきた。しかし、深く植えれば植穴内の温度が高く保たれ、霜害を受けにくい。こうして最適気温下・長期間育成により、株養成量が増えることになった。



「採りっきり栽培」の開発は産学連携で行なわれている。当日の受付会場内には、共催のパイオニアエコサイエンス㈱、茎葉誘引に使われる生分解性ネットの山弥織物㈱、土壌改良剤「ハイプロ-S」の㈱キングコール、新規ホーラーなどのブースが並んだ


元木悟准教授。アスパラガス研究の第一人者として知られる。本誌では「トマトのソバージュ栽培」を連載中

そこで疑問が一つわいてくる。「採りっきり」より、慣行法のように何年も収穫し続けたほうが手間もかからないのではないか。アスパラガス栽培は難しいとよくいわれる。なかでも茎枯病や斑点病などの病虫害対策がそうで、防除は栽培管理の要点になっている。

こうした病虫害はとくに栽培2年目から発生しやすい。だとすれば、1年で「採りっきり」にすれば対策にかかる手間も資材費も省けるのではないか。「採りっきり栽培」開発の背景にはそんな発想もあった。

病虫害回避とともに、「採りっきり栽培」が目指しているものに、省力化・軽作業化・低コスト化がある。その一環として早期定植による深植えを省力化するため、新規ホーラーも開発された。このホーラーは作業姿勢の改善にもなるという。ほかにもセル成型苗の鉢上げが不要なことも特色の一つだ。

高価格期に出荷できるメリット

キャンパス内の荒れ地を開墾して造成したという実験圃場には、立茎したアスパラガスが青く繁っていた。いずれも今春に定植したものだ。2年株も残されていたが、こちらは一部病害が発生していた。

定植時期別（2～6月）・品種別・マルチ色別に区分けされている。後作実験として栽培されたニンジンやキャベツの株も残っていた。ブロッコリーなども実験栽培されたという。

1時間ほどかけて圃場見学を終えた後は、校舎内で「採りっきり栽培」開発に携わる関係者による現状報告が行なわれた。元木悟氏（明治大学准教授）による概説、蕪野有貴氏（同大学博士課程）による君津市などでの栽培状況、松永邦則氏（パイオニアエコサイエンス園芸種子部）による育苗管理、川崎智弘氏（同）による東京都瑞穂町での栽培事例、最後に小林修一氏（JA利根沼田アスパラガス部会長）による伏せ込み促成栽培がそれになる。


圃場見学の場となった明大北圃場。青く繁っているのが今年定植した株。写真には写っていないが、昨年定植した2年株も圃場に残されていた


今年2月に定植した「大宝早生」。遅い時期の定植に比べると、やはり生育状態の良さが見て取れる。他の品種も栽培されているが、「大宝早生」は定植時期別・マルチ色別に、一番詳しい栽培データを取っていた

明大圃場での現状報告によると、「大宝早生」の場合、本格的な収穫は3月下旬から始まり、収量のピークは4月中旬から5月中旬になるという。6月下旬には収穫終了となる。2～4月定植に比べると、5～6月定植の収量は明らかに劣っていた。しかも、早期定植はL級規格以上の太物が多い傾向にある。現状では10a当たり1tが見込めるところまで来たという。今後、各地の取り組みによって研究が進めば、さらに収量は増えていくと予想される。

最後に「採りっきり栽培」の市場可能性について触れておこう。国産アスパラガスの市場入荷は夏場が中心になっている。冬場はオーストラリアやメキシコなどからの輸入品が多数派だ。春先、とくに4月は国産入荷量が少なく価格も高い。「採りっきり栽培」は、この高価格期が収穫期と重なるメリットも持っている。

（八木誠一）